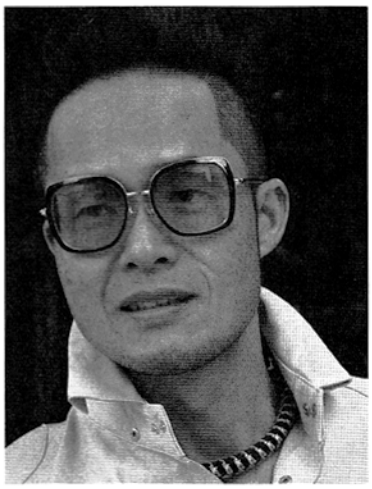
卒業生

日本発のガラスアートを世界に発信する

西中千人（昭和62年度卒）



のっけから、こんな話で恐縮ですが、在学中から薬剤師の道に進むことには抵抗を感じていました。

そんな私が大学を休学し、中国西安の西北大学に一年間留学したのは三年生を終了してすぐでした。

中国を選んだのは、中国古典文学が好きなのと、秦の始皇帝や遣隋使、遣唐使のイメージが強い古都長安を訪ねてみたかったからです。

近代化が始まってまもない中国社会の、煮えたぎるようなバイタリティや人間臭さを肌で感じたい気持ちもありました。実際、八〇年代の中国は人の熱気に溢れていました。とにかく人、人、人……。現地の人々の粗削りなパワーと大陸的なおおらかさに圧倒されました。

私も人民服を着て自転車に乗り、西安の市内をうろついたものです。

帰国後に復学し、星薬科大学を卒業。薬剤師免許も取得しました。

しかし、やはり医療関係の仕事には就く気にはなれません。注射が嫌いで、病院のような場所も苦手な私は薬剤師とは無縁の、東京丸の内にある画廊に勤め始めました。

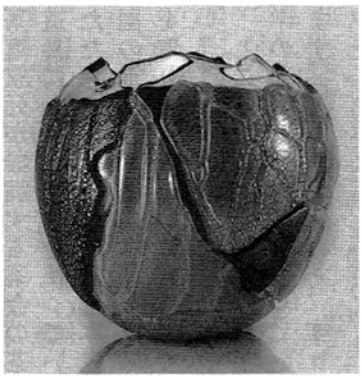
ここでダリやゴッホ、ユトリロなど世界の名だたる芸術家の作品に日々触れることで、創作意欲が芽生え始めました。要するに芸術の道に進みたくなったのです。

ただし、この時点では自分がやりたいことが油絵なのか、日本画なのか、彫刻なのか、全く定まっていませんでした。衝動はあっても、具体的なイメージは何一つ固まってなかったのです。

ガラスとの出会い そして、渡米

自分の進路に悩んでいた頃、浜辺をドライブしていて、偶然、あるガラス工房に立ち寄る機会がありました。これが私の人生の大きな転機となりました。

それまでガラスと言えば、建築ガラスや自動車ガラスのような無機的で、冷たいイメージしか私にはありませんでした。ところが、工房の坩堝でドロドロに溶け、オレンジ色に輝くガラスを見ているうちに激しい感動を覚えました。ガラスという素材に心底まいってしまったのです。そして、自分の進むべき道はここにあるのだと直感しました。



こうして私が次に勤めたのが、皇室の御用も賜る高級ガラス食器メーカー、カガミクリスタルです。

見習いとして働き、数カ月を経た頃、ある職人さんに声をかけられました。

「何十年か前にも、おまえさんに似たのがうちに来たよ。今は大学の先生をやっているはずだから、一度会ってみるといいんじゃないか」

その先生とは多摩美術大学の伊藤孚（まこと）教授（現在は名誉教授）です。私はさっそく伊藤先生を訪ねました。

そのとき、伊藤先生に言われたのが「本格的にガラスを勉強する気なら、アメリカの芸術大学に入ったほうがいい」ということでした。

私は伊藤先生の助言に従い、まもなく渡米。大学卒業から三年を経た、二十六歳のときでした。

異国で突きつけられたテーマ

入学したカリフォルニア芸術大学ではガラスアートと彫刻の技術や表現力を磨くだけでなく、社会におけるアートの役割など芸術に関する様々な理論を学びました。講師はいずれも第一線で活躍するアーティストであり、ここで学んだことは今も大きな財産となっています。

必死になって勉強し、ガラスの本場イタリアから来たクラスでトップの学生を追い抜いたこともありました。しかし、周囲の評価は、

「この日本人、案外やるね。鼻は低いくせに、技術力は高いじゃないか」

といった程度。視線が冷ややかなのです。

ガラス製造は約五千年前にエジプトで始まり、吹きガラスの技術は十三世紀にベネチアで完成しました。つまり、ガラスは西洋の伝統文化であり、西洋人にはそのプライドもあるのでしょう。

一方、日本においてガラスに匹敵する文化が陶器です。そこには自然の色合いや質感を大事にする日本の美意識が宿っており、欧米からも陶器のオリジナリティーは高く評価されています。

では、自分はガラスという西洋で進化を遂げた素材を使って、何を表現すればいいのか――。それは異国の地で、私に突きつけられた大きな課題でした。

その頃、私は一九八二年型シボレーコルベットを購入しました。シボレーコルベット

と言えば、アメリカの魂とまで称えられるスポーツカー。デザインをしたのは日系アメリカ人、しかも人種差別が色濃く残っていた六〇年代のことです。異国で自分が置かれた孤独な立場を思うとき、このクルマは私に大きな勇気を与えてくれました。

帰国する際にも手放すことができず、今もレストアしながら愛用しています。

今取り組んでいる「呼継」

ガラスで自分は何を表現すべきか。帰国し、作家として独立してからも、それは常に私の頭から消えることのないテーマでした。

悩みに悩み、創作の試行錯誤を重ねながら辿りついたのは、自分は日本人なのだという至極当たり前の事実。日本人なのだから、日本で育まれた伝統文化をベースに、二十一世紀の前衛芸術にも通じる独自のガラス表現を追求すればいいのだと考えるようになりました。

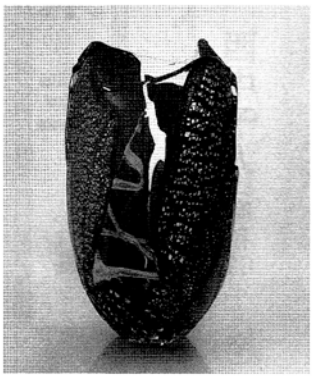
同時に、その作品を世界に向けて発信していくことが私の使命であるという覚悟も生まれました。世界中のより多くの人に理解してもらうためには誰よりも努力しなければならないし、誰よりも夢中になって創作に打ち込まなければなりません。

畢竟、芸術における創作とは創っては壊し、また創ることの連続です。それは自分自身を絶えず破壊し、創造することに他なりません。

はからずも、現在、私が取り組んでいる「呼継」は芸術の破壊と創造を象徴しています。これは作った器をあえて壊し、そのガラス片を溶かして継ぎ合わせる手法。もともと日本の陶芸にあった技法を独自の解釈で発展させ、ガラスに取り入れたものです。

幸い「呼継」はロンドンやニューヨークのアートフェアでも「日本を感じさせる」「着物を連想させる独創的な色柄使いが美しい」と、高い評価をいただきました。

国内では毎年、個展で作品を発表するほか、華道各流派とのコラボレーション作品や、テレビ番組で使うセットのオブジェの制作も行っています。



茶道家元が参加する茶会の茶道具にも私の作品を使っていただきました。最近は日本庭園の飛び石や枯山水にガラスを取り入れることにも挑んでいます。

ところで、大学で学んだ薬学の知識は創作に役立っています。アートとはいえ、ガラスという化合物を扱う以上、そこにはサイエンスの側面が厳然と存在するからです。

自分が信じる道を進む

結果的に薬剤師の道を外れ、ガラス作家となった私の経歴に、予想外のサクセスストーリーを想像する方がいるかもしれませんが、それは全くの誤解です。

閉鎖的で、保守的な日本のアートの世界にあって、何の後ろ盾もなく、この道を歩んできたわけですから、順風満帆であるはずがありません。おそらく、これからも逆風は吹き続けるはずです。

それでも私は、ガラスが持つ無限の可能性を信じ、自分にしか到達し得ない地平を目指して進むつもりです。

ガラスを前にワクワクする気持ちは、二十三歳のとき、初めて坩堝でドロドロに溶けたガラスを見て以来、ずっと変わっていません。

星薬科大学同窓会　　星薬会報 第71号
2013年7月

平成25年7月26日号

星薬会報

発行　星薬科大学同窓会
品川区荏原2－4－41
会長　久米基夫
TEL　(03)3785－3858
FAX　(03)3787－1325
e-mail　hajime@hoshi.ac.jp
編集責任者　岡地哲也（広報委員会）

71号の内容

会長挨拶……1
25・26年度執行部名簿……2
巡礼……3～8
卒業生……9～10
掲示板……11～13
卒後教育……13
支部長会……14
地方だより……15
同窓会特別講演会……16～17
区民公開講座お知らせ……18
理事会・評議員会報告……18～19
代議員会だより、編集後記……19～20
訃報、会費納入者名簿……21～24